

前川和也・岡村秀典編

『国家形成の比較研究』

寺前 直人

一 国家形成研究という枠組み

国家を論じること、それは人文科学、社会科学を問わず知識人の重大なテーマであった。欧米列強に対抗するため、早急な近代国家構築を目指した明治時代以来、国家のありようやその是非は政治家のみならず、多くの知識人によって繰り返し議論されてきたといえよう。しかし、「国家」の現在の意味は著しく変化、変節を遂げているという事実も、学問分野のみならず政治、経済分野においても広く共有されている意識ではなからうか。

そのような現代において、二十代から六十代の各分野の専門家が世界各地の古代国家の形成過程を論じた本書は、いみじくも今日の国家をめぐる苦悩と模索を浮かびあがらせているように思われる。

とはいえ、日本考古学なかでも弥生、古墳時代を専門とする評者にとって、本書掲載の一八本の論文が取り扱う地域、時代、対

象資料はあまりに膨大であり、個々の事実関係を研究史を踏まえて適切に位置づけることは困難である。そこで本書評では、前述の問題意識、すなわち地域や時代、対象資料を超えて共有されると思われる論点を抽出し、本書が意図した地域や分野の交流と相互比較が生み出したあるいは生み出しうるものに注目して、論評を加えていくこととする。

二 本書の構成と論点

(一) 本書の構成

本書の構成は次の通りである。なお、本書は京都大学人文科学研究所において前川和也を班長としておこなわれた共同研究「国家形成の比較研究」(二〇〇一年四月―二〇〇五年三月)の成果報告書である。

序 文

前川 和也

第一部 国家の形成

第一章 中央アンデス初期国家の権力基盤

—— 形成期社会とモチエの比較を通して ——

関 雄二

第二章 倭の国家形成過程とその理論的予察

福永 伸哉

第三章 日本列島の武力抗争と古代国家形成

松本 武彦

第四章 倭王権と文物・祭式の流通

下垣 仁志

第五章 日本列島の国家形成と宗教政策

菱田 哲郎

第六章 朝鮮半島西南部における古代国家形成過程の諸問題

吉井 秀夫

第七章 スウェーデンにおける国家形成

——文明の辺境としての北歐—— 角谷 英則

第二部 生産と社会編成

第八章 シュメールにおける都市国家と領域国家 前川 和也

第九章 器物の生産・授受・保有形態と王権 森下 章司

第一〇章 殷周時代における畜産の国家的編成 岡村 秀典

第十一章 百姓の成立

——中国における国家の形成によせて——

渡辺信一郎

第十二章 古代イランにおける社会組織の再編

——『アヴェスタ』の記述を中心に——

堂山英次郎

第三部 空間と王権

第十三章 適応としてのラピタ人の拡散戦略 石村 智

第十四章 国家形成前夜の遺跡動態

——京都府南部（山城）地域の事例から——

伊藤 淳史

第十五章 地域間関係からみた中原王朝の成り立ち 西江 清高

第十六章 古墳文化の領域論 河野 一隆

第十七章 王権の空間編成と国家形成

——中国歴代の城市遺跡から—— 宇野 隆夫

第十八章 北朝皇帝の行幸 藤井 律之

本書は、序文と前記の一八本の論文で構成される。対象とする地域は日本列島が七本、中国が五本と突出しており、中東地域が

二本、朝鮮半島、中央アンデス、南太平洋、スウェーデンがそれぞれ一本ずつとなっている。日本列島を対象とする論考七本中実に六本が弥生から古墳時代を対象としている。考古資料を中心とした論考が多いものの、ほとんどの考察が考古資料と文献あるいは伝承や言語資料といった多角的な資料を踏まえた検討が試みられているのも本書の特徴であるといえよう。

(二) 五つの論点

それでは、次の五つの視点に基づき、本書掲載の一八本の論文相互に共通する論点についてみていくこととする。とくに最初の三点は、関論文（第一章）が引用するアールの権力ソースに関する三つの属性^①、①イデオロギー、②経済、③戦争という区分を参考とし、後二つは④空間と国家、⑤共同体と国家、について論じることとする。

論点①「権力ソースとしてのイデオロギー」 関雄二は、中央アンデス形成期（紀元前二五〇〇〜紀元前後）において、灌漑規模がいまだ小さく、余剰生産物の備蓄を想起させる倉庫などが不明瞭にもかかわらず、巨大な祭祀建造物の構築と増設が認められることに注目し、食糧などの必需財、主生産物財が未発達段階で、労働力をはじめとするエネルギーの投資が他に先駆けてイデオロギーに対して実行された点を重視する（第一章）。

イデオロギーを社会資本の集中のプライムムーバーであるとする視点は、日本列島の古墳時代の成立に前方後円墳に表象される葬送儀礼を介した中心周辺関係の成立を説く福永伸哉の視点に共通する（第二章）。ただし、福永はあくまでその関係性の背後に、

長距離交易、具体的には朝鮮半島で生産される鉄資源の入手という、必需財の入手をめぐる広範囲での利害関係の出現を重視する点には注意が必要である。そういった経済的環境の変化に対する各地のエリート層間の調整手段こそが、イデオロギーであったわけだ。そして、その連合体の統一の具現化が前方後円墳の出現であり、その統一形態は中央権力の一方的な支配や搾取の結果ではなく、相互に現実的な利益をもたらす結合として成立し、「同床異夢」的な相違をはらみつつも、イデオロギーの共有は円滑かつ「平和」裏に進展したとするのである。

下垣仁志は、日本列島古墳時代における葬送イデオロギーを介した中心—周辺構造に詳細な検討を加えた(第四章)。とくに周辺地域、諸地域の儀礼が中央に吸収され統合、変換された後、再分配、拡散するというモデルの提案は興味深い。さらにこの吸収—再分配による古墳祭式の生成は、諸地域が新たな祭式を創成しなくなるにより、破綻していくという構造的欠陥を内包していると指摘している(八六頁)。

一方、森下章司は銅鏡を中心に古墳時代における器物の生産と授受、保有形態について論じるなかで(第九章)、福永や下垣と同じ地域、時代を対象としつつも、やや異なる視点を提示した。

森下は、古墳時代前期において銅鏡をはじめとする青銅器生産が集約的な体制へと変動したことを前提に、その分布状況に注目し、中央から地方への「配布」の具体像について迫り、生産と授受の一体性を指摘した(一九一頁)。

日本列島における中央と地方のイデオロギー戦略については七・八世紀の宗教政策を取り上げた菱田哲郎の分析も興味深い

(第五章)。菱田は『日本書紀』などから、地方寺院における護国經典や金光明経の受容のありかたを検討し、さらに中央系の瓦の拡散のありかたから、經典、僧侶、技術者を伴う複合的な宗教普及政策をみいだした(一〇五頁)。そして、七世紀中葉以降における生産分野での新たな規格の出現、税としての求心的な物流の確立期において、イデオロギー政策が重要な政策を果たしたことを文献史料と考古資料から読み解くのである(一一六頁)。また、菱田は直接言及しないものの、七世紀以降進化した日本列島における律令制形成期におけるイデオロギー政策の雛形が、先行して国家形成を達成した中国王朝の施策を真似た戦略であったことはいままでもない。

この点は、福永が指摘した紀元三世紀における華北王朝の冊封体制下において舶載した三角縁神獸鏡の配布を通じた倭王権のイデオロギー政策(五〇頁)や、角谷英則が伝承文献に基づき検討した鉄器時代後期／ヴァイキング時代(八一—一世紀)における北欧地域のありかた(第七章)との類似性がうかがわれる。とくに角谷の議論は、共同体の意向に常に左右され、ときに殺害される可能性すらあつた鉄器時代後期の「王」が、自らの正当性を外的なイデオロギーの導入、すなわちキリスト教を西欧文明から受容することにより確立したとする点で、きわめて示唆的である。

このような権力とイデオロギーの関係をさらに具体的に導き出したのが、古代イランにおけるゾロアスター教の導入過程の政治的背景を論じた堂山英次郎の議論である(第二二章)。堂山は広大な領土支配と土地管理を必要としたペルシア帝国の支配体制にとつて、社会全体が職能区分と土地区分によって把握、管理され、

祭官が地縁的社会組織の上に置かれてゐるゾロアスターの教えがきわめて好都合であつたからこそ、帝国支配のイデオロギーとして利用されたことを指摘した(二五〇～二五一頁)。

以上、本書においてイデオロギーと権力の関連について強い関心をもつた論考が数多くみられることは、本書の最大の特徴である。この点については後述したい。

論点②「権力ソースとしての経済」次に経済と権力、国家形成の関連についてみていこう。まずは奢侈品財政(wealth finance)と王権の關係について重視している論点をみていこう。奢侈品財政あるいは威信財^⑤という概念および用語は、今日の日本考古学に広く普及している。本書評にて、その用語の是非について論じることができないが、本書でも必需財ではない特定器物の生産体制やその分布に言及した論考は多い。

西江清高は、中国、二里頭文化期の銅礼器の独占と陶礼器の配布について検討し、遺跡規模、埋葬施設規模などを含めた検討から(第一五章)、畿内の地域と二次的地域からなる中原王朝政治域とその外部諸地域という「中国」的世界の原型をみいだす(三二〇頁)。

また、日本列島の弥生時代から古墳時代において青銅器生産体制が政治的に集約化される現象については、福永(第二章)と森下(第九章)が言及している。さらに河野一隆は、ウオーラーステインの世界システム論を念頭に置きつつ、紀元後二世紀代の東アジアにおいて中国帝国の需要を超えて氾濫した財が供出された結果、日本列島や朝鮮半島において葬制の場でそれらが競鬻的に消費されることにより社会秩序を表象するという厚葬墓依存型の

社会構造が形成されたというユニークなモデルを提示している(第一六章)。

一方、主生産物財政(staple finance)、必需財と王権の關係についての言及も前者に比べると少ないものの、次の論考において論じられている。

前川和也は南メソポタミアにおける都市国家から領域国家の変遷過程について、土地と水の管理、すなわち必需財の生産の観点から分析する(第八章)。具体的には、塩害による生産力低下が、必然的に耕地面積の拡大をもたらし、結果として領域国家という新たな社会システムをもたらしたことを主張する。灌漑環境の変化とそれに依存する人々の対応という關係は後に触れる石村論文(第一三章)との対比において興味深い。

同様に必需財に注目した研究としては、岡村秀典の論考があげられよう(第一〇章)。岡村は家畜と国家のありかたを通時的に論じた。まず、龍山時代において自給自足的なブタ畜産とシカの狩猟という肉供給体制を保持していた農耕社会が、殷周時代において大規模な牧場経営を前提とするウシの消費を主体とする社会が形成されること、これらを用いた祭儀を通じて君臣關係が維持されていたという相互の関連性をみいだした。ここで重要なのは、中国古代社会において家畜生産とイデオロギーの強固な運動が通徴されている点である。

家畜飼育に基づく食料資源を奢侈品とみるか必需財とみるかについては、意見が分かれるところであるが、関が論じた中央アンデス形成期におけるイデオロギーと財との結合關係の脆弱性(三五頁)とは対照的な状況が中国において認められることは重要で

ある。

論点③「権力ソースとしての戦争」 権力と戦争の關係についても、様々な議論がこれまで繰り返されてきた。とくに軍事組織もしくは武力の所在は、国家の強制力の所在として、これまで大変重視されてきたといえよう。しかしながら、本書では公的強力としての軍事論は影を潜め、むしろ段階的な発展過程に注目した論考が目立つ。

渡辺信一郎は、中国において前七～四世紀、鉄製農具の出現により雑草駆除と肥培管理過程の高度化が可能となり小農民経営が形成されること、結果、彼らが従来の戦車戦の担い手である貴族層にかわり、歩兵として軍役負担を担うようになったことを指摘している(第一章)。

このような軍事体制の変遷過程は、松木武彦が日本列島の古墳時代にみいだした軍事体制の変遷と興味深い一致をみせる(第三章)。まず、松木は紀元後三～五世紀において一般成員の同意と信服により、有力者の武力独占が認められるとする。つまり、「英雄時代」的軍事体制が形成されたというのだ。しかしながら、その体制は、六世紀における鉄・塩・食料などの生産を直接掌握して経済力を高めた群小墳の被葬者層と旧来の伝統的な勢力との緊張をへて、体制的・機構的に成熟した軍事体制へ変遷すると結論づけた。このうち前者の状況はアンデス、モチエ期における戦闘参加層がエリートに限定されていたという関の指摘と相通じる点がある(三〇頁)。

論点④「空間構成と王権」 本書でも第三部「空間と王権」として構成されている問題、すなわち空間的な資料から国家形成を

論じた論考の論点を抽出していくこととする。

宇野隆夫は中国新石器時代から明清代における城市遺跡の構造から、五千年間に及ぶ王権の発達段階を追究している(第一七章)。

一方、伊藤淳史は日本列島における弥生から古墳時代の集落規模と墓制、墓域の關係について、対象を山城地域に絞り、精緻で厳密な検討を試みた(第四章)。わずか三〇キロメートル四方の小地域を対象に細かな土器編年と詳細な分布状況に基づく検討は、日本考古学の最も得意とする研究方法でもある。伊藤はこの手法をもとに小地域ごとの集落格差を指摘した上で、その格差と大型前方後円墳の分布が一致しないというきわめて重要な事実を指摘している(三〇頁)。

空間(領土)、集団(国民)、その空間と集団に行き届く秩序と強制力を伴う国民国家への懷疑から、国家形成期の領域問題を扱った論考としては、次の二編があげられよう。国民国家論の超越を標榜する河野一隆は、今日の国家の領域区分でもある日韓の領域を四～六世紀の前方後円墳分布を用いて痛快に打ち破る(第一章六章)。河野は対馬海峡地域における前方後円墳の時期的変遷から、対馬→朝鮮半島榮山江流域→壹岐という前方後円墳の輪番的展開を読みといたのである(三二九頁)。

同様の視点は朝鮮半島南部西南部の国家形成過程を検討した吉井秀夫の議論にもみいだせよう(第六章)。吉井は百済中央勢力と倭王権中枢との間に位置する朝鮮半島南部榮山江流域に、仲介機能や半独立性をみだし、同じ地勢的關係に位置する北部九州地域にも同様の性格がみいだせる可能性を指摘した(一三四～一

三五頁)。

また、石村智は南太平洋地域の紀元前二千年期におけるラピタ人の拡散過程から、「海の社会」における社会進化プロセスを提示した(第一三章)。石村はラピタ人の人類史上稀にみる急速な拡散の背景に、枯渇を省みず手近の資源を獲得し資源の枯渇が現実となった場合、新天地に移動するという生存戦略を指摘し、これこそがその時点の環境に対する最適な適応であると結論づけた。藤井律之は紀元後五世紀における中国北朝に遊牧民族要素としての行幸・武威の誇示をみいだす(第一八章)。藤井の指摘する「動く皇帝」の存在は、ほぼ同時期の日本列島中央部というきわめて狭い領域のなかでの王権の所在を論じてきたいわゆる河内王朝論にも一定の示唆を与えるものとして興味深い。

論点⑤「共同体と国家」 エンゲルスの『起源』に基づけば、^④ 国家とは経営単位間における利害関係や矛盾を解消するために、従来の共同体構造(氏族制度)を破壊した後形成される秩序の総体であると定義できよう。しかしながら本書においてこの視点から共同体と国家のありようを直接的に取り上げた論考は少ない。渡辺信一郎は、農業技術の進展により小農民経営が紀元前七〜四世紀にかけての中国で広域に形成されたことを説き、彼らが軍役と租税を担う「百姓」となること、その成立と相前後して、旧来の族制的支配共同体は解体し、新たな君臣関係と官僚制度が登場することにより、中国における国家形成が完成するとする(第一章)。

評 岡村秀典も、同様に戦国期において王や諸侯を中心とする共同体秩序が崩壊し、宗族(家族)共同体に基づく整然とした身分制

や犠牲の序列の確立を指摘した(二〇五頁)。

三 国家形成過程の共通性とその課題

本書は、多彩な地域と時代を取り扱う一八本の論考集である一方で、各論者の関心や国家形成に関するアプローチは、一定の共通性を有している。以下、その共通性とそれに対する評者の読後感を述べることにする。

まず、各論考に共通して垣間みられるのは、国家形成においてイデオロギーの果たした役割の強調である(論点①)。また、イデオロギーを初期要因とする国家形成の円滑さや容易さを各論者が強調する一方で、容易さに反比例するその権力の脆弱性についても多くの論者が注意を促している点は興味深い。

また、日本列島とスウェーデンにおいて指摘されたように先行して国家が形成された地域の周辺に位置する地域において、一次国家による直接的な侵略や植民を受けるのではなく、イデオロギーを介在として統治制度を含む諸制度が「ゆるやかに」導入されることにより、二次的かつ外的成熟が先行した国家形成がなされる事例が認められる点も重要であろう。

一方、イデオロギーを権力形成の初期要因あるいは重要な属性として取り上げた論考には共通して次のような傾向がある。それは権力(者)間の融和と安定化が考古資料、文献記録に基づき、きわめて実証的に論じられるのに対して、支配―被支配層の関係性のなかで、このイデオロギー機構がいかなる機能を果たしたのかが不明瞭な点である。むしろ、直接的な支配あるいは搾取の関係ではなく、権力者と被支配者の両者が共通のイデオロギーを

信奉するとき、実際のな財や労働力の収奪に対する反発を一定程度抑制する機能が期待できよう。

このことは共同体と国家という論点の低調さ(論点⑤)とも相通じる今日の国家形成論の傾向といえるのではないだろうか。すなわち、アジア・太平洋戦争敗戦以前の日本国における政治体制を経験した研究者の多くには、国家に対する根源的な不信感に基づく、搾取や支配構造の解明という姿勢があったのに対し、ある世代以降の国家への姿勢は、その必然性と普遍性の重視という姿勢へと変化しているのではないだろうか。このことは是非を論じることではできないが、国家形成論に関する研究動向を考えると、この問題は意識されるべきであろう。

また、評者は国家形成論における共同体論についても、本書を通して次のような課題にめぐりあった。

それは、石村智が提起した社会進化の別シナリオを常に意識しながら国家形成論を論じる視点である。例えば、前川が南メソポタミアにおいてみいだしたように(第八章)、生存戦略として領域国家形成という選択がある一方で、石村が指摘する国家形成とは別の「シナリオ」を選択した社会が存在するのである。

そして、その選択主体は、国家から想起されるような大規模な社会組織でない場合もあろう。つまり、国家権力と個々の共同体の関係は、その形成期であればあるほど、個別的な対応の余地がありえたのではないだろうか。例えば、河野が論じた対海峡をはさむ海域において交易を介在させた多様な境界域の展開(第十六章)は、領域国家的な空間の二項対立的区分を拒絶する。

実際の交易活動に従事した集団が両地域の権力とどのような関

係にあったのか。対馬や壱岐における弥生時代の考古資料の状況は、それぞれ別の権力下にあると想起しがちな列島という朝鮮半島という区分が単純ではないことを教えてくれる。この海域に活動した「海の社会」の人々はいかなる生存戦略に基づいて行動したのか。本書を通読した後、評者が個人的に関心をもったテーマの一つである。

論じ残した論点や課題は多いが、研究領域が細分化され、分野においてもとすれば思考停止になりがちな国家形成というテーマに正面から取り組んだ本書に敬意を表し、上記の課題を自らのものとして今後の研究を進めていきたい。

① Earle T.K. *How Chiefs Come to Power: The Political Economy in Prehistory*, Stanford University Press, 1997.

② 福永伸哉「古墳の出現と中央政権の儀礼管理」『考古学研究』第四六巻第一号、一九九九年。

③ 日本考古学において「威信財」という用語が導入されているのは、弥生時代の銅鐸(春成秀爾「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第一集、国立歴史民俗博物館、一九八二年)そして古墳時代の副葬品(穴沢味光「三角縁神獣鏡と威信財システム(上)(下)」『潮流』第四報・第五報、いわき地域学会、一九八五年)などがあげられよう。

④ エンゲルス、F(村井康男・村田陽一訳)『家族・私有財産および国家の起源』国民文庫、大月書店、一九五四年。

⑤ 山尾幸久氏、都出比呂志氏、溝口孝司氏により国家形成について『考古学研究』にて誌上討論された内容は、世代間の国家形成論に対する課題、問題意識の齟齬を端的にあらわしている(山尾幸久「歴史

学：考古学・人類学——溝口論文に触れての偶感——』『考古学研究』第四卷第四号、一九九八年、溝口孝司「メタセオリー、一般理論と考古学の場所」(同)、都出比呂志「国家形成史の比較考古学の提案」(同)。

⑥ 吉田 広「武器形青銅器にみる帰属意識」『考古学研究』第四九卷第四号、考古学研究会、二〇〇二年。

(A5判 三九一頁 二〇〇五年五月 学生社 本体八二〇〇円)
(大阪大学大学院文学研究科助手)